

にちぎん

2017 NO.52

冬



インタビュー 扉を開く

ロバート キャンベル 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館長

言語遺産の継承と新たな「知」の創造に向かって

地域の底力

京都府宮津市・京丹後市・伊根町・与謝野町

地域を支える人々の思いが広くつながる「海の京都」丹後地方

エッセイ “おかね”を語る

三浦しをん 作家 たにまち願望

特別記事

みんなで見よう、日銀動画！

好きなバンドや役者さんや伝統芸能に思いを馳せるたび、「たにまち」という言葉が浮かぶ。もし私に三兆円あったら、アルバム制作費も主演映画制作費も舞台制作費も全部出すのだが！

ご自身の力で輝いているかたばかりなので、私のようなたにまちは必要ないでしょうけれど……。あと、三兆円は多すぎるか？ 三億円ぐらいか？ 財布に三万円以上入ってたことがないので、いくらあればたにまちになれるのか、基準がわからない。

たにまちは本来、相撲のひいき筋を指す言葉のようだが、「とにかく応援したい！」という熱い思いと財力を兼ね備えたかたちだろう。憧れた。私がついにまちなちになったら、映画の内容に「あなただけを出してしまいたいけど、あなたをよりきらめかせるのは、アクション映画だと思おうの！」など、真のたにまちはむろん、黙ってお金を出すのみはず。そこもカッコいい。

「稼いだお金をなかに使うか」に、品性が表れる気がする。蓄財とかマンション購入とかにあるのではなく、稼いだはしから「応援」にまわす。自分以外のだけのため、自分以外のだけへの愛を表明するため、金を稼ぎ、使う。私はそれを、非常に崇高であると同時に、自身の欲望にある意味で正直な、まっとうな行いだなど感じる。

しかし当然、たにまちになれるほどの稼ぎが



絵・江口修平

たにまち願望

三浦しをん

ないので、脳内会議室のテーブルに札束を積みあげる夢想をするだけに終わる。これじゃただの成金みただ、と夢想のなかの自分にがっかりする。スマートなたにまちになるのは、(夢想といえど) むしろかしい。欲望のきらつきをなるとけ抑え、無私の精神で応援できる品性を養うべく、脳内たにまち修業はつづく。

では現実の私が、なにお金を使っているかというと、大半が創作物だ。本や漫画を買ったり、CDやDVDを買ったり、ライブや劇場に行ったり、といったことにほとんどの時間とお金を費やしている。「プチたにまち活動」と言えるかもしれない。貯金？ 老後？ 捨て置き。次の瞬間には車にはねられて死ぬかもしれないのに、老後のことなど考えてどうする。

いや、三〇歳ぐらいのときは、「こんな不安定な仕事で、老後とかどうすればいいんだろう」と不安でならなかった。貯金もちょっとしてみたりした。でも、だんだんどうでもよくなってきた。不安定なのはあいかわらずだが、不安に慣れたのである。

もししたら今後、揺り戻しが来て、少しは貯金に励むようになるのかもしれない。それでもやっぱり、「プチたにまち活動」はやめられないだろう。お金を、「応援」と「愛の表明」に使う人間でありたいと思っている。

みうら・しをん●1976年東京生まれ。2000年、小説『格闘する者に〇』でデビュー。2006年『まほろ駅前多田便利軒』で直木賞を、2012年『舟を編む』で本屋大賞を、2015年『あの家に暮らす四人の女』で織田作之助賞を受賞。小説に『風が強く吹いている』『神去なあなあ日常』など、著作多数。最新刊は『ぐるぐる♡博物館』。小説『光』が映画化され、11月より全国公開。



撮影：松蔭浩之



2 エッセイ／“おかね”を語る
たにまち願望 作家 三浦しをん

4 インタビュー／扉を開く
ロバート キャンベル 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館長
言語遺産の継承と新たな「知」の創造に向かって

9 地域の底力——京都府宮津市・京丹後市・伊根町・与謝野町
地域を支える人々の思いが広がってつながる「海の京都」丹後地方

18 貨幣の世界——⑥ [形 その5]
現代の貨幣—国もいろいろ形もいろいろ—(3)

20 特別記事
みんなで見よう、日銀動画！

22 FOCUS → BOJ ⑳ 日本銀行金融研究所「情報技術研究センター」の仕事
ISO 専門委員会の国内事務局として
金融サービスの国際標準化を進める

日本銀行のレポートから

26 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2017年10月—

28 「金融システムレポート」—2017年10月—

32 トピックス
デジタルイノベーションに関する国際会議を開催ほか

35 AIR MAIL from New York
ニューヨークの地下鉄に日本の技・心遣いあり



表紙のことは

日本銀行仙台支店は、昭和十六年（一九四一）十月に、日本銀行の第一八番目の支店として現店舗の建つ仙台市青葉区の中心部「芭蕉の辻」に開設されました。

最初の店舗は、昭和二十年（一九四五）七月の仙台大空襲により、金庫と倉庫を除き全焼してしまいました。しかし、店舗焼失から一週間程度は支店長宅に営業所を設け、その後は、農林中央金庫仙台支店の一角を間借りして営業を続けました。

今回表紙に掲載した店舗は、空襲の翌年、昭和二十一年（一九四六）十一月に初代店舗と同じ地に再建された二代目となります。終戦直後の物資不足等の影響で資材の調達には制約を受けつつも、木造石板の二階建ての建物で、当時は立派な建物だと話題になったそうです。

その後、三代目となる現店舗に建て替えるまでの十四年にわたり、「芭蕉の辻」で仙台の街を見守り続けました。



表紙・画 北村公司



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館長

ロバート キャンベル

Robert Campbell

米国出身の日本文学研究者で、東京大学大学院教授から「国文学研究資料館」の館長に就任したロバート キャンベル博士。国内外に点在する日本の「古典籍」を調査・収集し、そこに残された知恵や知識を現代に活用する事業に積極的に取り組んでいる。世界でも稀な資料館が日本に存在する理由、古典にも現代作品にも垣間見える日本人の特徴、近年の「共感」への違和感——多岐にわたり、示唆に富む話をいただいた。

言語遺産の継承と 新たな「知」の創造に向かって

千三百年の歴史を刻んだ 「古典籍」を調査収集

——二〇一七年四月、東京大学

大学院教授から「国文学研究資料館」（国文研）の第七代館長に、外国人として初めて就任されました。まず、読者にはなじみが薄い国文研についてお話を伺えますでしょうか。

キャンベル 国文研はもともと国の機関として一九七二年に創設され、四五年の歴史を持っています。現在は、「大学共同利用機関」として日本のあらゆる研究・教育機関とさまざまな分野で共同研究を推進する、というミッションを受け、一つ一つの研究機関ではできないことを行っています。

根幹事業として行ってきたの

は、日本の古典籍（近代以前に筆写または印刷された和書）を調査し、書誌データと画像で集積することです。国内はもとより世界中に点在する、日本の明治以前の文献を見いだし、写真に収め、実物も収集して世界の共有の研究素材として公開し活用するのです。

——古典籍の現物を調査し収集するのですか。

キャンベル 国文研は現物主義です。まず、古典籍の在りかを突き止め、実物がどういう状態にあるか、書物としてどのような特質を持っているかを調べます。江戸時代の版本であれば印刷はいつの時代の技術なのか、

出版の母体はどこなのかなどの調査をします。次に、古典籍の全編画像を撮影し、マイクロフィルムや電子画像で全て保管するとともに、研究者や一般の方々に開放して活用を図っています。

古典籍の書誌学的な調査は、国文研の研究者と日本の津々浦々の大学・博物館の研究者・学芸員らが、地域ごとに協力しながら行ってきました。国文研は創設以来、そのような「国家百年の計」とも言うべき地道な仕事を続けてきたんです。

——それを今も続けていますか。

キャンベル コツコツと続けています。日本は関東大震災で首都が破壊され、第二次世界大戦の空襲で全国的に大きな打撃を受けて、文学資料や記録史料、

日本人の精神生活を証言するような書物が数多く失われました。日本人は昔から文字資料を大事に伝承するメンタリティーを育んでいました。しかし、戦後、核家族化や地方から都会への人口移動が進むなかで、江戸時代の版本や先祖代々の家の記録などがどんどん破棄されていきましました。近代百年の間に自然破壊が進んだのと同様に、昔の人々が墨と紙で記録し、伝えてきた資料も犠牲になっていったのです。

国文研は、そのように日本の言語文化・精神文化が削がれていく状況に危機意識を募らせた人たちが創設した研究機関です。戦前から戦中に研究者になった世代が中心となって設立運動を起し、政治家に働きかけて、創設に尽力しました。こ

うした研究機関はイギリスやフランスにもありそうでありません。ですから、これからどんなことがあっても、人類の遺産として日本の古典籍をここにどうめ、整理し、広く活用できるように提供し続けなければならぬと考えています。

——国文研には四〇万点以上の画像と原資料があるとのことですが、これで古典籍の何割を網羅していることになりませんか。

キャンベル 半分もあります。日本の古典籍は千三百年の歴史があり、その種類も多様です。一八八〇年代に定着した近代的な「文学」の範囲では分類できない古典籍が少なくないです。たとえば江戸期の「絵俳書」は、俳諧の作品と一緒に多色刷りの素晴らしい絵が描かれています。それを文学か美術か、と問うのは無意味です。絵俳書は読むだけでなく、目でも楽しむものだったからです。文字と図像が密接に絡む古典籍は多く、文学か医療か思想なのか、線引きが難しい場合があります。

また、古典籍は大多数が古文

や漢文で、くずし字で書かれています。国文研では、少しずつですが、それを現代の日本人が読める活字に置き換える取り組み、「翻字」も進めています。

——明治維新を境に、書き言葉は古文から言文一致体へ、表記もくずし字から楷書体へと一変した結果、日本語が断絶されたと言語を鳴らしていらつしやいますね。

キャンベル 江戸期の地方文書などで、現在の活字で読めるものは全体の二割もありません。九割以上がまだ原本（くずし字）のままです。ほとんどの日本人

が読めないものとして放置されているのです。近代以降、日本の文化だと語られているものが、実は、せいぜい一割の資料に基づいているだけという場合もあるかもしれません。

明治政府が推進した言文一致などの国語政策は、国民国家をつくり、近代化を達成するうえで必要不可欠だったのでしょう。しかしその裏側で日本語に断絶が生じたこと、断絶により削ぎ落とされた言語文化があることを、今私たちは認識しなければいけない。私はそのことを強く思っています。

近世も現代も物語に「期限」を盛り込む

——お金にまつわる歴史を遡ると、江戸時代の買物には「掛け」が主流で、大晦日になると借金返済に追われる町人が多かったようです。ところが今の日本人は借金や投資にも慎重になってきている。ここにも断絶があるのか、それとも何か共通項でつながりがあるのでしょうか。

ば読者に「手形」を切ったうえで物語が進むのです。そのような特徴が近代以前にも現代にも共通して見られます。

数年前に直木賞を受賞した、葉室麟さんの歴史小説『鯛ノ記』では、豊後の小さな藩で奥祐筆（幕府・藩等で文書・記録を作成する役職）を務めていた武士が、山間の村に暮らす同じ藩の元・郡奉行（地方行政の役職）を訪ねるシーンから物語が始まります。そして、その元・郡奉行が七年前、藩主の側室と密通し、さらに小姓を切り捨てた疑いで村に幽閉され、事件当時から十年後、話の始まり時点では三年後に切腹するように先代藩主から命じられていることが明かされます。元・奥祐筆の若い武士は、元・郡奉行が死ぬのを見届けよ、という過酷な使命を果たせるかどうか。物語は今から三年後の切腹」という期限を切つて、動き出すのです。

——近世の文学ではどのような例がありますか。

キャンベル 元禄期に登場した近松門左衛門は心中物の浄瑠璃



Robert Campbell ●ニューヨーク市生まれ。カリフォルニア大学パークレー校卒業。ハーバード大学大学院東アジア言語文化学博士課程修了、文学博士。専門は近世・近代文学で、19世紀（江戸後期～明治前半）の漢文学と、漢文学に関連の深い文芸ジャンル、芸術、メディア、思想などへの造詣が深い。1985年に九州大学文学部研究生として来日。87年、同学部専任講師。95年、国立・国文学研究資料館助教授。2000年、東京大学大学院総合文化研究科助教授に就任し、比較文学比較文化コース（大学院）、学際日本文化論（教養学部後期課程）、国文・漢文学部会（同学部前期課程）を担当。07年、同研究科教授。17年4月から国文学研究資料館の館長に就任した。文部科学省中央教育審議会教育課程部会委員、九州大学経営協議会委員、東京国立博物館評議員会評議員、東京芸術文化評議会評議員なども務める。編著に『ロバート キャンベルの小説家神髄——現代作家6人との対話』（NHK出版）、『読むことの力——東大駒場連続講義』（講談社）などがある。

をいくつも遺しましたが、その悲劇の多くは借金の踏み倒しが原因です。『曾根崎心中』は、遊女お初を馴染み客の徳兵衛が身請けし、妻を迎えようとお金を工面する。しかしその借金をうっかり友人に貸してしまった揚げ句、返してもらえない。自分も返済の期限を守ることができなくなり、徳兵衛とお初は、真夜中に手を取り合って曾根崎天神の森に向かうのです。

心中物は大体そんなパターンです。返済期限という社会的な合意が守られるか、ということが物語の土俵としてあるんです。裏を返せば、それだけ「信用」の力が日本社会では強い。恋が成就するかどうかという要素を超えて、社会の一員として信用を守りつつ生きることができかどうかという要素に、物語が頼っているほどのですから。

——何事も期限を重視して行う

傾向は日本人にあると思います。他方、将来の不確実性に対して日本人は弱いかも知れません。将来の不確実性をコントロールするために自ら期限をつくっている、ということでしょうか。キャンベル 四年近く前に東京オリンピックが決まった際、SNSをチェックしてみたら、単純に勝つたと喜んでいただけでなく、みんなが七年という「期限」を世界から与えられた、だから福島を考えよう、雇用を考えよう等、その時のそれぞれの人にとっての一番の関心事をその期限で解決しているこうと考えた。これに私は感動しました。また、組織のマネジメントでも似たようなことを皆さんも感じる場面があるかと思えます。たとえば事業を企画して進めるときに、みんな今は何も解答を持っていないけれども、とにかく打ち合わせを三日後、一週間後に設定するだけで安心するんです。それまでの宿題が出れば、真面目にやってきます。そういうふう

に日本人は時間の踊り場を重ねながら進み、物事を達成する。でも踊り場がない「螺旋階段」は不得意ですね。上がっているか下がっているかわかりにくい。リスクな進み方は、おおむね日本人は苦手とするところで。ただ、リスクだけけれどもハイリタインの成功事例がいくつかその組織の中にあると、割とそれを受け入れるということはあります。国文研について言えば、リスクとは言いませんが従来とは違った発想の事業にも取り組んでいます。小説家や画家、舞台芸術家などを国文研に招き、所蔵資料などを作品づくりに生かしてもらっているんです。そんな新しい事業をどうやって始めたかという、まずタイムスケジュールを作り、全体の構想が固まらないうちに担当する組織と責任者やメンバーも決めました。すると「大丈夫」という雰囲気になり、どんどん事が進んで行ったのです。「期限と器」が決まれば即、動ける。これは日本の健全なカルチャーの一つだと思います。



「共感」が孕む危うさと 「言語遺産」が包含する知恵

——二〇一七年四月に九州大学の入学式で祝辞を述べられました。その際、教養について「他人の目を通じて世界を見る力、言い換えれば共感力」という定義を紹介され、また「理性に裏打ちされない共感ほど危険なものはない」と強調されました。キャンベル 世界の紛争は共感の不足から発生しているという議論がある一方で、アメリカの研究者らが最近、共感の危うさについて優れた考察を発表しています。身近な者への共感が、身近ではない者との戦争を生み

出すことがあるというのです。ポピュリズムの台頭やフェイクニュースの増加も、一つの主義主張への共感で固まったコミュニケーションが起きていると言えるかもしれません。

背景にはインターネットのフィルターバブルの影響もあるでしょう。検索エンジンやSNSで自分の考えを補強するものだけを取り入れたり、自分の好みをアルゴリズムによって推測され、しつこく勧められたりする。考えると恐ろしいことです。ファクトだけでなく異なる思考も排除された、自分だけの濃厚な情報世界に浸ってしまう危険性があるからです。

——事実を押さえ、反対意見も取り入れながら、自分で考えることができるかどうか。それができないと、共感の落とし穴に陥るかもしれない。

キャンベル 小中学校で二〇二〇年以降に実施される学習指導要

領のワーキングチームにおいて、強く主張した考え方があります。例えば国語あるいは英語の教育とは、単科毎に考えられてお互いの間に交流がほとんどないが、両方を言語活動として総括的に見る視点が重要だということ。さらに視覚リテラシーという視点も非常に重要だということも主張しました。今、小学校高学年以上の生徒は、ただ文字を見るだけではなく、インターネット上でさまざまな映像や音声と一緒に文字を見ている。そうした生徒の「見る」という状況において、自分で主体的に選び取り、読み込んで決めていく、良し悪しあるいは功罪を判断するための力——リテラシー——の獲得には、英語だけ、あるいは国語だけという単科ではとても対応できません。リテラシーという概念をもっと総合的に捉え、教育に反映すべきだと思います。

——日本の古典籍も文学として見るだけでなく、近代以前の人々の生活や知恵の記録として見る

キャンベル 私は日本の古典籍を「言語遺産」と呼んでいきます。その中には膨大で具体的な教え、知恵、知識、感性などが包含されています。文学という枠で切り取ると勉強チックになつて、限られた人にしか遺産は活用されないでしょう。でも、そこから豊富な知恵をくみ取ることが出来る人たちは、文学研究者以外にも無数にいるはず。私は、文学以外の活動にも日本の古典籍を橋渡ししていきたい。

国文研では現在、三〇万点の古典籍の画像をデータベースに構築する大型研究事業を進めています。古典籍を等しくカバーし、文字からも絵からも自在に検索可能にする計画です。他分野で活躍する人や団体と共同研究もしています。国文研は古典籍を調査収集しながら、その先で新しい価値に発展させる工夫を重ねることが大事だと思っています。

——本日は、ありがとうございました。

地域の底力

宮津市・京丹後市・伊根町・与謝野町

地域を支える人々の 思いが広くつながる 「海の京都」丹後地方

京都府北部の市町が一体となり、
観光事業に取り組む「海の京都」。
その一翼を担う丹後地方では、
観光、伝統産業、飲食、交通と、
それぞれを担う人の努力が花開き、
未来に向けて実を結ぼうとしている。

丹後半島の北東部に位置する伊根町の夜景。手前に広がる伊根湾は一年を通して波静かな状態のことが多く、水面が灯りを映す幻想的な景色が望める。並ぶ家屋は、舟屋と呼ばれるこの地域独特の伝統的な造りになっている。

取材・文 山内史子 写真 野瀬勝一



時代の変遷に合わせた 観光への取り組みをめざす

京都府北部の福知山市、舞鶴市、綾部市、宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町が一体となって展開する通称「海の京都」。今回はその中から丹後地方の四市町を訪れ、観光を基軸とした現状と未来への展望を探ってみた。

最初にお話を伺ったのは、宮津市でエネルギーを中心とする地域商社を展開する三洋商事代表取締役社長・今井一雄氏だ。今井氏は京都経済同友会北部委員会委員長、

宮津商工会議所会頭として、地域の活性化にも深く関わっている。

「『海の京都』以前は、京都に海があるというイメージは全く持たれていませんでした。また、天橋立の名を知っていても、日本のどこに位置するのかわからない方がご存じなかったんです。『海の京都』を通じて、宮津に天橋立があることや、丹後が古代からの神話や歴史の宝庫でもあることを知ってもらいたいですね」

神話につながる代表格が、かつて豊受大神が祀られ、天照大神から呼び寄せられて伊勢神宮に遷ったとされる「元伊勢・丹後一宮 籠



豊受大神が祀られていた宮津市の「籠神社」。豊受大神は、食物や穀物を司る神。酒造りにも長けており、美味美酒に恵まれた丹後を象徴しているかのよう。



三洋商事代表取締役社長の今井一雄氏と、本能寺の変の後、逆臣・明智光秀の娘として一時期丹後国にかくまわれた細川ガラシャの像。左奥、1896年創立の宮津教会は、国内にある現役の聖堂としては最も歴史ある建物。

神社」だ。その奥宮は、伊弉諾尊が天界からはしごを降ろした場所だという。また、聖徳太子の母である穴穂部間人皇女が「一時期丹後に身を寄せていたなど、歴史的な逸話も多数残る。今井氏は過去を振り返りながらこう語った。

「旅の形態が団体から個人に変化し、さらに海外からの旅行者が増加するなか、見て終わりの昔ながらの観光地は、飽きられるしリピーターも生まれません。時代の変化に対応した形で『ここにあるものを自分たちで磨き直して観光に活かそう』という意識が当地でも生まれています」

すでに外国人旅行者が好む造り

や長期滞在に対応した宿泊施設も現れてきた。さらに、「海の京都」に合わせるかのように二〇一六年、京都からの高速道路が丹後地方の奥の方まで延びたこともあり、外国人旅行者が着実に増えているという。その中には、今や移動が便利で宿泊費もリーズナブルな丹後を拠点として、京都市内や大阪、神戸へと出かける旅行者もいるという。

丹後地域のインバウンド需要の伸びしろは大きいと今井氏は話す。

「京都市内への外国人旅行者は増えていますが、その数からみたら丹後地域まで足を延ばす人は、まだまだ少ない。神社仏閣に飽き



左／「KUSKA」代表取締役の楠泰彦氏は、「大がかりな開発がなされていない分、丹後は昔ながらの営みが残る」と魅力を語る。下／子どもを持つ若い世代の女性が働きやすいよう、工房の作業時間はフレキシブルに調整できる。

足らずに丹後半島のような自然環境を希望する方は増えるでしょう。そうした旅行者をこちらに誘導するため、京都市内各所との連携を密にしていけるかが今後の大きな課題ですね」

宮津市も日本の他の地域同様に、少子高齢化が進む。とはいえ、若い世代が新規の飲食店や宿泊施設をつくったり、イベントを立ち上げたりという動きもあるという。観光業の活性化や交通の便の向上は、若者の流出対策にもつながると今井氏は期待する。

「丹後から京都まで車でわずか一時間半です。都会はたまに行けばいい、生活はこちらのほうがお

もしろい、というイメージもできつつあります。将来きつと、都会ではなくこちらに住んでも良いという人が増える時代が来ます」

伝統産業に吹いた 温故知新の新たな風

丹後の新たな産業の柱が観光ならば、一帯におけるかつての丹後の主要産業だったのが、丹後ちりめんだ。最盛期の一九七三年には年間一〇〇〇万反も生産され、機をガチャンと織るほどに万札が稼げることを意味する「ガチャマン」という言葉もあった。

しかしながら着物文化の衰退や安値輸入品との競合もあり、現在の生産量は年間三〇万反ほどまで

減っている。そうしたなかで売り上げを伸ばしているのが、ネクタイをはじめとする「KUSKA」のちりめんの技術を活かした手織りの商品だ。

代表を務める楠泰彦氏の実家は、宮津市に隣接する与謝野町で一九三六年から織物業を営んでいるという。楠氏は、当初は家業を継ぐ予定はなく、東京で建設関係の企業に就職。その後、二〇〇七年に帰郷した。

「ピーク時から四〇年以上ずっと右肩下がりの産業なのに、同じことをしていてもしょうがない。オリジナルを模索するうちに、手織りに行き着きました。昔の技法に戻すのではなく、時代の進化や技術そして経験を踏まえた上で、改革して新しいものをつくるという発想です」

そこで機械織機を全て撤去して、手織り機を導入。当初は、職人とたった二人からのスタートだった。手織り反物が売れないなか、その打開策として自社ブランド「KUSKA」を二〇一〇年に設立。翌年以降、東京の原宿や銀座に本店を置く二つの有名百貨店



ちりめん産業でにぎわった与謝野町加悦地区に残る、江戸時代末期建築の生糸ちりめん商家「旧尾藤家住宅」。「ちりめん街道」と呼ばれる旧街道沿いに建つ。

やセレクトショップから注文が入ったことが、上昇への転機に。二〇一五年には京都の烏丸三条に自社ショールーム兼店舗を設け、さらには欧州の世界最高峰のメンズ服飾展示会にも出展して、高い評価を得た。その商品のロゴマークには、「TANGGO」の文字が記されている。

「『KYOTO』のほうがブランドインゲ的にわかりやすいでしょう。しかし、自分たちのアイデンティティーをロゴに入れたかったんです。私が生まれた場所、丹後には織物をつくってきた三〇〇年の歴史がある。だからこそクオリティーの高いものができるという思いを込めました」

「飯尾醸造」五代目当主の飯尾彰浩氏は、無農薬の米づくりからはじまる本業はもちろん、2017年開業のイタリアンレストランではスタッフとして自らもてなし役を務める。



現在、楠氏を含めて社員は若い男性と主婦層を中心に一三人。さまざまなメディアで紹介されたことで認知度が高まり、地元出身の若い世代から、商品や就職に関する問い合わせも入るそうだ。

「衰退する様子を見てきた僕らの世代にとって、丹後ちりめんの業界は古くさい印象がありますので、それを払拭したいという思いがあります。丹後でつくったものが世界で勝負できることを、地元の人たちにもっと知ってもらいたい」

東京や海外への出店も目指しているそうだが、楠氏はこうも付けて

加えた。

「でも、最後にはこの与謝野町に店を構えたい。現在四〇歳の私が六〇歳ぐらいになる頃にここに戻ってきて、工房兼ショールームという形で世界各地から『TAN GO』にお客さんが訪れるようにしたいと考えています」

まちを思う心が 背中を押した新規事業

家業を継ぎつつ、新たな試みに挑んでいるのは、宮津市にある飯尾醸造五代目当主・飯尾彰浩氏もまた同じだ。一八九三年創業の飯尾醸造は、無農薬の新米を原料とし、昔ながらの製法で時間をかけて日本酒から仕込む「富士酢」で知られる。そのふくよかな味わいは、全国の一流料理店の職人から支持されている。

「三代目、祖父の輝之助が、一九六四年に無農薬へとかじを切りました。近所の田んぼに農薬が撒かれ、カエルや虫、ドジョウがいなくなっ ていく様子を見て、そこでつくられたお米をお酢の原料にすることに違和感を覚えたようです」



そう話す飯尾氏は地域活性化に向けて、「二〇二五年に丹後を日本のサンセバスチャンに」を高らかに掲げている。

スペイン東北部のリゾート地サンセバスチャンは、今こそミッシュランの星付きレストランが数多く集まる「美食の街」として世界的に知られる。しかし、その始まりは、若いシェフたちが始めたわずか数軒のレストランだったという。

飯尾氏が丹後において上げたのろしが、二〇一七年七月にオープンした築二二〇年の古民家をリノベーションしたシックなイタリアンレストラン「アチエート」だ（「アチエート」はイタリア語で「酢」という意味）。

上／古民家を利用したイタリアンレストラン「アチエート」。料理の多くには、飯尾醸造の酢が隠し味として使われている。左／飯尾醸造の蔵内には多彩なラインナップがそろったシヨップが設けられ、観光客が立ち寄る。



食材の魚介類やジビエの多くは丹後の漁師・猟師から直接入手。米は自家栽培で、野菜は地元の有機農家から仕入れる。食材を厳選した「アチエート」は、「あの富士酢の飯尾醸造が経営する」と開店早々から食通の話題を呼び、地元はもちろん全国から、おいしさに魅了されたリピーターが足を運んでいる。

「実は、この建物は別の方が所有されていて、四つ予定されていたテナントの一つとして私は鮎店



上／伊根湾は写真中央の青島が風を防ぐ形となり、通年、波はおだやか。左／伊根湾に向かって建ち、一階が船の収納場所になっている舟屋は、この地区特有の建築。

を出す予定でした。ところが、二年待っても他のテナントが集まらない。その間に美食で町を良くしたいという思いが高まり、ならば自分がやろうと建物を買ってしまいました」

当初はイタリアンと鮨店を同時に開店させる計画だったが、鮨職人の都合がつかず、まずはイタリアンのみからとなったそうだ。鮨店は、二〇一八年に同じ敷地内で開業を予定している。

「経営のことだけ考えたら、経

営が安定しているお酢屋だけでなく、飲食店を手がけるべきではないのでしょうか。しかし、飲食店を営むことにより、町に貢献できる可能性は、雇用や観光客を集める点で広がる。私はここに骨をうずめるつもりでいますし、子供もいる。たとえ自分の会社が安定していても、町に元気がなかったら楽しい余生は過ごせないと思うんです」

飯尾醸造ではこれまでも、無農薬米の田植えや収穫体験、蔵見学で年間約三〇〇〇人を集客してきた。

「飲食店を含め飯尾醸造をフックにして、丹後に来てくださる方を増やしたいと思っています」

うまし酒もまた地域の活力を担う

食とともに丹後の魅力を語る上で欠かせないのは、日本酒。現在、丹後にある一〇軒の酒蔵の中で注目を集めている蔵の一つが、人口約二〇〇〇人の伊根町にある向井酒造だ。一七五四年創業。一階が海に続く舟の収納場所。二階が住居という、江戸時代中期から受け

継がれてきた舟屋が並ぶ、伊根湾沿いの一角に蔵が建っている。



躍進のきっかけとなった「伊根満開」(左)と、昔から地元で親しまれてきた「京の春」を手にする、向井酒造杜氏の向井久仁子氏。「伊根のPRのため、新しく造った銘柄にはすべて『伊根』の文字を入れています」と話す。

杜氏の向井久仁子氏は東京農業大学の恩師の指導の下、古代米を使った淡い紅色の「伊根満開」を一九九九年に打ち出した。厚みがありながらもキレのようまさがありながらも徐々に広がり、やがて全都道府県から注文が舞いこむ状況に。現在では、世界最高とされるデンマークのレストランでも供されるなど、海外でも高い評価を得ている。

向井氏はまた、丹後地域振興計画など、地域振興にも携わってきた。重要伝統的建造物群保存地区に指定された舟屋の人気や「海の

京都」のPR効果もあり、伊根を訪れる観光客が増加している。伊根が好きで進学の時ですら伊根から出たくなかったと語る向井氏が守りたいと願うのは今ある日常だ。

「伊根には生活感が残っていて、そこが好きなんです。このきれいな景色を守るためにはある程度の規制はあつていいのですが、整えすぎるのは何か違うなど。つくられた感じの観光地にはしたくないと思っています」

地元中学校でも、卒業生として伊根の魅力を語るといふ。

「山で木の実をとったり、海に潜ってサザエをとったりすることは都会ではできない。都会に出て

木下酒造代表取締役社長の木下善人氏(左)と、杜氏のフィリップ・ハーバー氏。ハーバー氏はオックスフォード大学卒業後、JETプログラム[※]の英語教師として来日し、日本酒に魅せられた。イギリス・コーンウォール地方にある人口約70人の村出身。「ここは田舎ですが、私にとっては衝撃ではなかった」と冗談めかして久美浜を語った。



美酒を介して 世界に広がる丹後の魅力

その向井酒造から丹後半島を西へぐるりとめぐり、西の付け根のから友達づくりとかで絶対役に立つし、自分の個性につながるから、目いっぱい遊んで、伊根を熟知した方がいいと話しているんです」
自分が学生だった時代には都会に憧れて出ていった人が多かったが、最近では伊根の良さに気づいて戻ってくる若い人たちが出てきたと、向井氏は笑顔を見せた。

京丹後市久美浜町に位置するのは一八四二年創業の木下酒造。創業時から地元で愛されてきた「玉川」をつくるのは、日本で唯一の英国人杜氏フィリップ・ハーバー氏だ。

二〇〇七年、ハーバー氏を招聘した代表取締役社長の木下善人氏は、上撰、佳撰以外は、ハーバー氏が思う酒を、思うようにつくることを申し入れたそう。そこで

ハーバー氏が提案したのは、蔵の特色の出る昔ながらの家つき酵母からつくる山廃^{やまはい}。その味わいは、骨太で濃醇だ。さらに当時は主流だった炭素ろ過を施さないのので、黄色みを帯びている。

「大吟醸のようなきれいなお酒が主流の時代ですから、この酒が売れるのか? と正直なところ思いました」

その頃の木下酒造では、需要の九割方が地元。長年にわたり透明な日本酒に親しんできた人たちのなかには、色が濃いのは古くなっているからとの誤解も生じ、一時期、売り上げは激減する。

その色も味のうちだと何年も説明しているうち、ひと呼吸おいてゆつくりと体に染み渡る味わい同



木下酒造ののれんには、一七五年前の創業以来受け継がれてきた代表銘柄の「玉川」の文字が記されている。その由来は「近隣を流れる川上谷川の水が、神聖な玉のようにきれいだったことにちなんでいます」と木下氏は話す。

様、おいしいとの評判がじわじわ広がり、「玉川」は地元にあたためて根付く。さらには全国的にも人氣が高まり、なかでも夏酒の先駆けとなった「Ice Breaker」は、仕込み前にすでに翌年の酒販店向けの予約分が完売。「玉川」を求め、遠路はるばる久美浜の蔵を訪ねてくる人も増えたという。

うまし酒造りに邁進^{まいしん}する木下氏とハーバー氏は、他の蔵より早い時期から熟成酒にも挑んできた。

「熟成酒は、変化していくプロセスがおもしろいんですが、そうしたらうちくはさておき、とにかく

くおいしい」

そう話すハーバー氏は、造りの最中、ほとんど蔵にこもりきりになるが、蔵の向かい側の兜山^{かぶと}から見る日本海の景色が好きだという。

「日本海と久美浜湾を隔てる砂州は、小さな天橋立を意味する、『小天橋』と呼ばれているんです」との話を木下氏が継ぐ。

「日本海があり、内海があり、すぐ後ろに山があり、海のものも山のものも、食べ物も本場においしい。生まれ育ったところというのもあると思いますが、久美浜ぐらいいいところはないと思います」

現在、「玉川」は海外でも人気



木下酒造の向かい側にある兜山の頂上から一望できる京丹後市久美浜湾と「小天橋」。天橋立と同様、砂州によって外海と隔てられている。(写真提供:京丹後市)



ウィラー・トレインズ代表取締役の寒竹聖一氏。運営を担う京丹後鉄道は、「丹後くるまつ号」「丹後あかまつ号」などの観光列車が耳目を集めるが、東海道新幹線ゼロ系に使われたシートを一部で再利用するなど、普通列車にも乗客が心地よく過ごせる工夫が随所に施されている。

があり、ハーバー氏はPRのため
に欧米を訪れるが、それによって
丹後の存在を世界に伝えられるの
がうれしいという。

「京都と聞くと皆さん、世界遺産
のある古都を思うわけです。でも、
京丹後や久美浜のことを今まで気
にすることもなかった人に、酒と
併せて地域の魅力を語れる。すご
く楽しいですね」

ハーバー氏をはじめ、丹後各地
でものづくりに勤しむ方々が皆、
地元への深い愛情を抱いているの
が感慨深く胸に刻まれた。

地元の人々と連携した 鉄道路線のありかた

この地域を縦貫して人々の足と
なっているのが、京丹後鉄道（丹
鉄）だ。第三セクターが運営して
いた「北近畿タンゴ鉄道」から、
二〇一五年に高速バスの事業を柱
とするウィラー社が運行を担うこ
とになり、心機一転のスタートを
きった。

京丹後鉄道は、関西で南海、
阪急に次いで三番目に長い路線を
有している。

「二―四キロという長さがあり
ますから、地域の足としての役割
が大きい。それを機能させるため
には、まずは安全第一が基本。そ
の上で、地域の活性化にどう貢献
できるかだと思っています」と、
ウィラー・トレインズ代表取締役
の寒竹聖一氏は語る。

丹鉄では、水戸岡鋭治氏デザイ
ンの観光列車が高い人気を呼んで
いる一方、寒竹氏が大切にしてい
るのは、地域の人たちとのコミュ
ニケーションだ。

例えば沿線の小学生には年四
回、運転士やアテンダントが記事

上／京丹後鉄道宮豊線の天橋立駅。文字通り、天橋立
観光の玄関口となる。下／丹後半島の先端、断崖絶壁の
リアス式海岸が続くカマヤ海岸は、一帯でも随一の絶景。
野生のニホンザルが生息する、豊かな自然が残る。



を書く「たんでつこども新聞」を
配布し、鉄道への理解を深めるこ
とにつなげている。未就学児とそ
の親を対象とする、鉄道玩具で遊
べる「おもちゃ列車」も毎月運行。
また、第三セクター時代は経験豊
富なJRのOB採用が中心であつ
たが、自分たちでつくる会社にし
ようと、地元の若い人たちを積極
的に雇用している。

一方で、地元の高校生が車両を
使ったイベントを試みたり、観光
列車では旅館の女将による案内や
果物の生産者の直販を行ったり
と、周辺の人たちが京丹後鉄道
を利用する動きも見られる。

「列車の価値にいろいろな方が
気づき始めて、一緒にやりましょ



うという雰囲気ができつつありま
す。丹後の人たちは、奥ゆかしい。
この自然と同じで飾り気がない
んです。自分を売ろうという感じ
もないです。そんな気質をわ
かってもらおうというのも僕の使命
だと思っています」

現職就任とともに移住し、丹後
に魅せられたという寒竹氏は「H
IDDEN KYOTO」という言
葉を口にした。

『隠された京都』。私どもだけ
の合言葉なんです。食材、反物、
歴史、神話といった和の源流が丹

京丹後市役所企画政策課主任の小西宏和氏が背にする立岩は、ユネスコ世界ジオパークに認定された「山陰海岸ジオパーク」を代表するスポットの一つ。立岩がある丹後町間人は、希少な松葉ガニ「間人ガニ」が水揚げされることでも知られる。



後にはある。海外からの旅行者を含めて、それをもっと知ってもらおうというアプローチを始めています」

将来的に目指すのは、地域のネットワークづくりとさまざまな地域情報のプラットフォーム化。線である鉄道の路線を広く面の移動へと変えるため、地域交通との連携会議も定期的に行っている。

**思いやりとともに
細かく延びる地域の足**

地域交通の要、路線バスに関しては、全線上限二〇〇円に料金を

丹後半島の西側、京丹後市網野町に位置し、全長約一・八キロメートルの白砂が続く「琴引浜」。歩くとキュッキュッと音がする鳴き砂が観光客に人気。国指定の天然記念物・名勝指定。



統一して利用者数が増えた京丹後市の取り組みがおもしろい。

「路線バスの利用者は年々増えており、開始当初から比べると二倍以上になりました。また、料金を統一したことで移動できる範囲が拡大し、高校生の進学の見学が広がったと感謝されています」

そう話すのは、京丹後市役所企画政策課の小西宏和氏だ。利用が増えたそのかげでは、広報誌での案内、冊子にした時刻表の市内全世界帯への配布など、周知のための

地道な努力が重ねられてきた。京丹後市は、人口約五万六〇〇〇人の三割以上が六五歳以上。利便性を高めるために、バス停以外にどこでも降りられるエリアも設けられた。

「高齢者の方の外出を促すことは、医療費の削減につながるだけではなく、生きがいを持つきっかけにもなりますから」

とはいえ、路線バスだけではすべてを網羅するのは難しい。とりわけ過疎が進む市北部の丹後町では、バス停まで歩くのもひと苦労という場所も多い。そんな問題を解消するために二〇一四年に誕生したのが、NPO法人に委託して運行する予約制の「デマンドバス」だ。

「丹後町は日本海に面して全体的に坂道が多く、路線バスは坂の上の幹線道路しか走っていないため、お年寄りやバスを利用するのが非常に困難だったんです。家の近くまで来てもらえないかとの要望も多くありました」と背景を語るのは、運行を請け負うNPO「気張る！ふるさと丹後町」の広報担当理事の東恒好氏だ。

さらに二〇一六年には、住民がドライバーを務める、マイカーに



NPO法人「気張る！ふるさと丹後町」理事長の村上正宏氏（右）は丹後町「寿雲山萬福寺」の住職、広報担当理事の東恒好氏は一級建築士と、本業を抱えつつ地域のために活動を続けている。「ささえ合い交通」の表示が貼られた車は、村上氏のマイカー。

よる配車サービス「ささえ合い交通」が始まる。デマンドバスとは異なり、年中無休で午前八時から午後八時までであれば、スマートフォンでいつでも好きな時間に呼べる。

「『ささえ合い交通』の利用はこの一年間で、毎月平均六〇回以上。一日当たり二回運行という状況で、予想以上です」とは東氏。

NPO法人の理事長を務める村上正宏氏は、「デマンドバス」「ささえ合い交通」ともに自らドライ



天橋立南端と天橋立駅側の陸地を結び、船舶の通行時に水平に90度旋回する廻旋橋。1923年の完成当時は手動式だったが、現在は電動式で観光客向けに定期的に旋回する。



バーとなって活動しているが、外に出て欲しい年配の方ほど、わざわざ来てもらうことに恐縮する傾向があると話す。

「僕が寺の坊主だからというところもあるのか、お迎えに行くところ『申しわけない』となるんですよ。とくにおばあちゃんたちは遠慮深い。その意識を変えつつ、地道に利用を拡げていければと思っています」

文字通り「ささえ合い」の積み重ねが実り、高齢者が日常気楽に外出するための支援につながっている。また、観光客も自由に利用できることから、ジオパーク観光の移動にも大いに貢献。現在使

用している配車アプリは多言語対応しているので、海外の方もスムーズに活用できると、東氏も話す。

北前船の時代のよう に広がる日本海エリアの連携

未来に向け、観光の連携は丹後半島、そして「海の京都」のエリアからさらに広がるようとしているのにも心を惹かれた。京都丹後鉄道の母体であるウィラーは二〇一七年九月、新潟市、福井県敦賀市、京都府舞鶴市、兵庫県豊岡市と連動して新たな観光ルートを構築する「日本海縦断観光ルート・プロジェクト」を打ち出した。

冒頭にお話を伺った今井一雄氏によれば、高速道路が豊岡市まで延び、最終的には山陰道までつながる将来を見据え、二〇一六年からは鳥取から宮津までの商工会議所の会頭・会長会議が行われるようになったそうだ。

「まだ年に一度の情報交換を行うぐらいですが、画期的な動きだと思っています。かつての北前船のようなつながりが、新たにできればおもしろいですよね」

今井氏は、舞鶴からフェリーを利用して小樽に向かおうとしていた外国人女性との出会いを述懐しつつ語を加えた。

「今まで私には、そんな発想はなかったんです。でも、地球の大きさから見たら、海外から来た人にとっては、舞鶴から小樽までの移動は大した距離ではないのですね。われわれはもっと勉強しなければならぬと考えさせられました」

将来的に「海の京都」は、古代同様に日本海側のターミナルにもなり得る可能性を秘めている。多

彩な交通手段が結ぶ広域での連携が実現できれば、北前船がにぎわいを運んだ時代のように各地で笑顔が広がり、それぞれが住むまちへの思いがいっそう深まってくるのではないだろうか。



日本三景のひとつ天橋立は、全長約三・六キロメートル。インバウンドの旅行者が頼りにする「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」では、その景観が二ツ星の評価を得ている。

（注）利用者からの呼び出しや料金徴収のシステムは、ICT（情報通信技術）を駆使した配車アプリを活用。乗車は京丹後市丹後町内、降車は京丹後市全域という制限つきで認められている。



貨幣の世界

6

貨幣同士の識別を簡単にしたり、偽造しづらくするために円形以外の貨幣の形が採用されることもあります。前回に続き、近代以降の多角形を中心とした貨幣を紹介します。

形

その5

現代の貨幣 国もいろいろ形もいろいろ (3)

十角形

チリでは、前回紹介した八角形の貨幣だけでなく、十角形の貨幣も日常的に使用されています(写真1)。アフリカ東部の国タンザニアも日常的に使う貨幣や記念貨幣に十角形を採用しています(写真2)。このほか、ドミニカなどいくつかの国でも十角形の記念貨幣が発行されています(写真3)。

写真1 チリ 50ペソ アルミニウム青銅貨 (1981年～発行)



八角形でも紹介した、独立戦争の英雄 Bernardo O' Higgins (ベルナルド・オイギンス) 将軍が描かれています。日常的に使用される貨幣として、1981年以降発行されています。(直径25mm、重量7g)

十一角形

日本では、この形自体を目にする機会にはほとんどありませんが、カナダ(写真4)やチェコ(写真5)、マダガスカル(写真6)では、日常的に使用されています。次回はさらに角が立ちます。

写真4 カナダ 1ドル 青銅メッキのニッケル貨 (1987年～発行)



日常的に使用される貨幣として発行されました。表面には、元首であるエリザベス二世女王の横顔、裏面は、北極圏で繁殖し、冬季に温帯で過ごす渡り鳥アビをあしらっています。ちなみに、エリザベス女王の横顔は発行後数回変更されています。(直径26.5mm、重量7g)

写真3 ドミニカ 世界人権宣言(35周年)記念1ペソ白銅貨
(1983年発行)



中南米の島国ドミニカにおいて、世界人権宣言 35 周年を記念して発行されました。裏面に描かれた3人は、スペインによる植民地化への抵抗や奴隷による反乱のリーダーたちです。3人の上にはスペイン語で「人権の始まり」と掲げられています。(直径 33.54mm、重量約 17 g)

写真2 タンザニア 独立10周年記念5シリング白銅貨
(1971年発行)



タンザニアは、大陸にあるタンガニーカ(1961年独立)とインド洋上の諸島であるザンジバル(1963年独立)の連合共和国です。表面には、タンガニーカ独立の指導者にして、1985年の引退まで同国の大統領を20年以上務めたニエレレ大統領(1922~1999年)が描かれています。1972年から、この記念貨幣と同サイズで若干デザインを変更した日常用の貨幣が発行されました。なお、1987年からはサイズが縮小され(18mm<1990年銘17mm)、肖像も第2代ムウィニ大統領に変更されています。(直径31.5mm、重量約14g)

写真6 マダガスカル 50アリアリー ステンレススチール貨
(1992年~発行)



マダガスカルはアフリカ東海岸沖に浮かぶ島国。貨幣の裏面には、フランスの作家サン=テグジュペリの「星の王子様」で悪役にされてしまった「バオバブ」の木が描かれています。ちなみにバオバブは、マダガスカルをはじめアフリカ東南部などに生育し、樹高約20m、直径約10mにも達する巨木です。

(直径 30 mm、重量約 10 g)

写真5 チェコ 2コルナ ニッケルメッキのスチール貨
(1993年~発行)



日常的に使用する貨幣です。表面は東欧の中央に位置する国チェコの国章のライオン、裏面には、額面金額と9世紀~10世紀に栄えたモラヴィア王国(チェコの東部)で使用されていたボタンをデザインしています。

(直径 21.5mm、重量約 4 g)

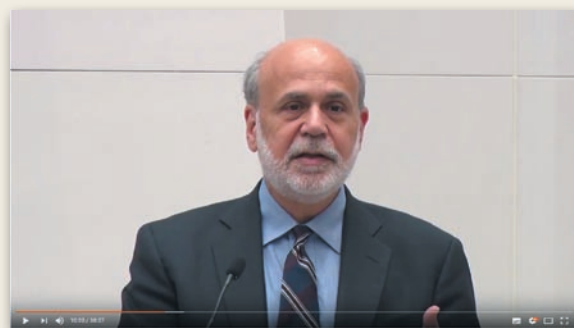
(写真はすべて個人蔵)

みんなで見よう、日銀動画！

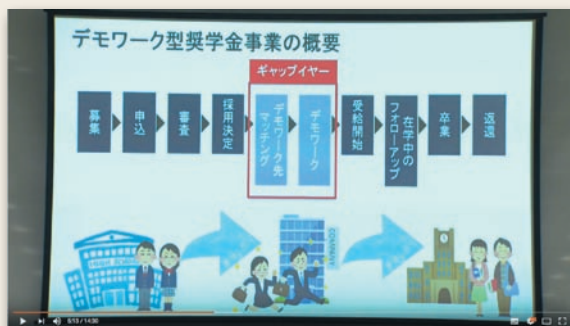
「日本銀行の文章は難しい」。よく伺うご意見です。私たちも日々改善に向けた努力を行っていますが、文章だけでは伝わりにくいこともあります。そこで、より分かりやすく情報を伝えるために、ホームページやパンフレットでは、よりビジュアルなものにするように努めています。また、さらに推し進めて「動画」も作成し、インターネットでどなたでも視聴できるようにしています。現在、次のようなコンテンツを掲載しています。

主要コンテンツ

1 金融研究所国際コンファランス——黒田総裁挨拶、バーナンキ前 FRB 議長講演の様様



2 日銀グランプリ——第12回日銀グランプリ決勝大会の様様



3 夏休み子ども特別見学会——どんな催しかダイジェストで見ることができます





日銀動画へのアクセスの方法

- ① 日本銀行 HP から
ここをクリック!
- ② 検索ページあるいは
YouTube から
BOJchannel で検索。
(<https://www.youtube.com/user/BOJchannel>)



日本銀行は、これからもさまざまな動画を通じて、皆さまに分かりやすい情報提供に努めていきたいと考えています。

4 金融機構局金融高度化センターのセミナー



5 貨幣博物館の紹介



6 暮らしとつながる日本銀行



日本銀行金融研究所「情報技術研究センター」の仕事

ISO専門委員会の国内事務局として 金融サービスの国際標準化を進める

金融機関の間で円滑に金融取引が行われるためには、その手順や形式が「標準化」されていることが重要です。一昔前は手形や小切手、各種の帳票類が標準化の対象でした。しかし金融のさまざまな事務のシステム化が進んだ現在では、オンラインで交換される通信メッセージの形式や、電子化されたデータの安全性を確保する暗号など、情報通信技術・情報セキュリティ技術が新たな標準化の対象となつていきます。

金融サービスの国際標準化に取り組んでいるのは国際標準化機構（ISO）の金融サービス専門委員会（TC 68）です。そしてTC 68の日本国内の事務局を務めているのが日本銀行金融研究所・情報技術研究センターです。今回は、金融サービスの国際標準化を中心に当センターの活動を詳しく紹介します。

グローバル化と情報技術の進歩が 金融サービスの国際標準化を促す

さまざまな製品・サービスの国際標準の審議・制定を行う非政府組織であるISO（International Organization for Standardization：国際標準化機構）は、分野別に専門委員会（Technical Committee：略してTC）を設けています。その中で六八番目に設置された専門委員会「TC 68」

が金融サービスに関する標準化を担当しています。加盟八十数カ国の中央銀行や規格協会等が各国の事務局となり、標準化活動を進めています。

「日本では日本銀行金融研究所が、日本工業標準調査会（わが国唯一のISO加入機関）からの委託を受け、TC 68に関する国際標準原案の検討や国内委員会の意見の取りまとめを行う国内審議団体となっており、その事務局を金融研究所情報技術研究センターが担当

しています」と同センター情報技術標準化グループ長の橋本崇さんは説明します。

情報技術研究センターの設立は二〇〇五年。金融取引の大半が電子取引に変わるなかで、金融業務に利用される情報技術の国際標準化を推進し、情報セキュリティ技術や重要情報インフラ保護に関する研究を進めることなどを目的に設立されました。現在のスタッフは約一〇人。その過半数が理系出身者です。

日本の金融界では、かつては国内を念頭においた標準化が中心で、国際金融取引を除けば、海外の業務システムとの互換性・整合性という観点は重視されていませんでした。現在でも日本の金融情報システムには日本独自の仕様が少なくありません。

しかし「金融サービスの仕様が日本と各国でバラバラでも構わない、という状況は崩れつつあります」と橋本さんは指摘します。

「企業活動のグローバル化、情報技術の急



ISO の国際会議 (日本銀行で開催した時の様子)

速な進歩を背景に、金融サービスは言語の壁や規制・慣行の違いを超えた貿易財と化し、その領域はどんどん拡大しています。そうした状況下で国際標準に対応していないと、国際的な金融取引で不便を強いられるだけでなく、セキュリティの観点からも問題となります。さらに金融サービスのイノベーションを推進するのも難しくなるでしょう」

国際標準化の取り組みには、地道な作業と国内外の連携が必要になります。「国際標準」とは、製品・サービスの品質・方法・安全性などに関する「国際的な取り決め」です。そのため、さまざまな金融サービスが国際標準化されるまでには、ISO / TC 68 に加盟する各国委員会での意見の交換や集約、加盟国間での協議や投票を経なければなりません。

最終的に国際規格として発行されるまで、通常、七段階の策定プロセスを経ることになっています。そして七段階の途中で一定以上の賛成数が得られなかった場合や、開発着手当初に定められた期間内（最長でも四八カ月以内）に合意に至らなかった場合は、プロジェクト（国際規格として発行するか検討した原案等）そのものが取り消されてしまいます。

国内委員会にて集約した意見を国際的に働きかける

では、情報技術研究センターは、ISO / TC 68 の国内事務局として、どのように国際標準化を進めるのでしょうか。

同センターの中村啓佑さんは「TC 68 の国際事務局から、新しい国際規格の提案や原案について賛成か反対かを投票するように依頼された場合は、日本の『国内委員会』のメンバーの方々に伝え、審議・検討し、わが国としての意見を集約した上で、一票を投じます」と説明します。

日本の国内委員会は、銀行、証券会社、全国銀行協会、日本証券業協会、メーカー、通信事業者、官庁など、五五の企業・団体などで構成されています（二〇一七年十月現在）。そうした国内委員会のメンバーに対し、中村さんをはじめ当センターはTC 68 からの依頼事項を右から左へと伝えるわけではありません

国際規格策定のプロセス

プロジェクトの段階	関連文書	
	名称	略語
1. 予備段階	予備業務項目 (Preliminary work item)	PWI
2. 提案段階	新業務項目提案 (New work item Proposal)	NP
3. 作成段階	作業原案 (Working Draft)	WD
4. 委員会段階	委員会原案 (Committee Draft)	CD
5. 照会段階	国際規格案 (Draft International Standard)	DIS
6. 承認段階	最終国際規格案 (Final Draft International Standard)	FDIS
7. 発行段階	国際規格 (International Standard)	IS

FOCUS → BOJ

「判断材料とともに『日本としてはこうするほうがよいのではないか』という案をメンバーの方々に示します。その案をたたき台に議論し、国内委員会としての意見を集約していく。そして集約された意見が採用されるように、TC 68での投票や国際会議を通じて国際的な働きかけを行います」（中村さん）

国際規格策定プロセスの第二段階では、ある国から新たな規格の制定が提案され、その投票を行うことが合意された場合、①参加国（議決権を有する Participating member）の過半数が賛成し、②五カ国以上が新規規格の策定プロジェクトに参加する意向を表明する。この二つをクリアすれば、第三段階の「作

業原案の作成」に進むといったプロセスが第七段階まで続くのです（図表）。こうした投票案件は二〇一六年度には五〇件弱実施されており、情報技術研究センターはその都度、国内委員会メンバーと緊密に意見交換を行っています。投票案件のほか、作業原案や国際規格原案についての意見・照会等も多く、それらに対しても同センターは日本としての見解をまとめた上で、TC 68において各国と協議します。

このようなプロセスを経て、TC 68から数々の国際規格が発行されました。例えば、JPY（日本円）やUSD（米ドル）EUR（ユーロ）といった各国の通貨の符号（コード）も、ISO 4217という国際標準規格で決められています。また、「ISO 20022」は、金融サービス全般を対象とする通信メッセージの国際規格として開発の段階から注目を集めました。ISO 20022の通信メッセージ・フォーマットは、二〇一五年に全面稼働した「新日銀ネット」において外国為替の円決済などの電文に採用されたのをはじめ、国内外の金融サービスに広く浸透しています。

ちなみに、ISO 20022とは「XML」と呼ばれるデータ記述言語（注1）を主に利用する金融通信メッセージです。XMLが登場したのは九〇年代後半のこと。インターネッ

トで使われるHTML同様に、ある情報の属性に関するラベルをつける（タグで囲む）XMLは、データ項目の体系を自由に設計できる柔軟性・拡張性を備えています。そのため、XMLをベースにした通信メッセージがさまざまな分野で事実上の標準となってきました。そうしてXMLベースの通信メッセージに対する知見が蓄積されると、金融サービスにおいて国際標準化に向けた検討が開始され、ISO 20022の開発・発行へとつながったのです。

「フィンテック」の発展に不可欠な情報セキュリティ技術を研究する

近年、金融(Finance)と技術(Technology)を組み合わせたFinTech＝フィンテックという言葉が生まれ、フィンテック企業の活動が世界的に活発化しています。ISO/TC 68でも、フィンテックという新しい世界的な動きをどう標準化していくか、活発な議論が行われています。

具体的には、モバイル金融やデジタル通貨、オープンAPI（あるアプリケーションの機能や管理するデータを、他企業のアプリケーションから呼び出して利用するための接続仕様等）を利用した決済サービスなど、各分野で国際標準化の可能性について検討されています。また、デジタル通貨から金融資

ISO/TC 68 国内委員会	
ISO/TC68国内委員会について	お知らせ 2017年11月7日 ISO 20022 Registration Activity Report-October 2017 を関連資料に掲載しました。 2017年10月13日 ISO/TC68国内委員会(6/14開催)の議事録 📄 を掲載しました。 2017年10月13日 ISO/TC68年次総会等の様様 📄 を掲載しました。 2017年10月13日 ISO/TC68活動報告書(2016年度) 📄 を掲載しました。 2017年10月13日 会員一覧(所属先の組織名称のみ掲載) 📄 を更新しました。 2017年10月13日 現在のISO/TC68体制表 📄 を更新しました。 2017年5月1日 「ISO/TC68国内委員会運営規約」 📄 を更新しました。
活動状況	
関連資料	
ISO/TC68関連国際規格	
リンク	
日本銀行金融研究所	今回の会合の予定 ISO/TC68国内委員会 ・日 時 未 定 ・開催場所 日本銀行本店(新館)
日本銀行	
Copyright Bank of Japan All Rights Reserved. <small>注意事項 プライバシーポリシーについて お問い合わせ</small>	

産、不動産、医療情報など幅広い分野への応用が期待されているブロックチェーンおよび分散型台帳技術(注2)については、新たな専門委員会(ISO/TC307)が設置され、二〇一七年の第一回会議で用語の定義から標準化作業を進めていくことが決議されました。日本ではTC68の国内委員会がTC307との協力関係を構築しており、当センターからTC307の会議等に参加しています。

フィンテックは、今後金融サービス向上のカギとなるものですが、他方で情報セキュリティの水準を高める必要があります。中村さんはこう話します。

「TC68の分科委員会(Sub-Committee:略してSC)には、セキュリティ面を中心に標準化要件を検討する『SC2』があります。現在SC2では、オープンAPIを活用したサービスについてセキュリティ対策を整理しているところです。各国のメンバーと電話会議等を通じてドラフト(原案)を作成しています。議論した結果をSC2からTC68へ伝え、国際標準規格が安心・安全なものになるように努めています」(ISO/TC68国内委員会のホームページをご覧ください)。

こうしたセキュリティ面の標準化を議論するうえで、当センターにおける金融サービスで利用される情報セキュリティ技術に関する理論的、実務的な研究が重要となります。その成果は、研究論文や当センターが毎年主催する「情報セキュリティ・シンポジウム」で発表されています。

ちなみに、二〇一七年三月の同シンポジウム——金融機関の実務者や官公庁関係者のほか、暗号学者、システム開発・運用に携わる実務者や技術者など約一〇〇人が参加——は、「新たな金融サービスを支える高機能暗

号」をテーマに開催されました。

「フィンテック企業などの新しい金融サービスを提供する企業がオンラインで金融機関の機密性の高いデータを取り扱う場合、通信途中で漏えいするリスクが懸念されます。そのリスクを軽減するため高機能暗号の研究開発が活発化しています。例えば、データを暗号化したままキーワード検索や計算処理が可能となれば、データが通信上で盗取されても暗号が解除されていないので漏えいなどのリスクは軽減されます。実現への課題は残りますが、高機能暗号に基づく金融サービスが提供されれば、安全性と利便性を両立できそうです」と当センターで暗号研究を進める清藤武暢^{せいとうたけ}さんは語ります。

情報技術の革新や標準化だけでなく、金融取引の利便性と安全性が大きく向上すれば、金融サービスの発展を大きく後押しするでしょう。情報技術研究センターは、今後も国際標準化の活動や情報セキュリティの研究を通じて貢献していきます。

(注1) データ記述言語/コンピュータ上でデータを扱う際に利用する言語。

(注2) ブロックチェーンおよび分散型台帳技術/仮想通貨ビットコイン等を支える技術として考案。必ずしも確立された定義はないが、分散型台帳技術は、複数の取引データを記録する台帳について、特定の台帳管理主体を置くかわりに、複数の参加者が同じ台帳を共有するという「分散型」での管理を可能とする技術。ブロックチェーンはそれを実装するための技術のひとつを指すことが多い。



日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月および10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。本稿では、2017年10月の展望レポート（基本的見解は10月31日公表、背景説明を含む全文は11月1日公表）のポイントを解説します。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。 <http://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/>

「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）

— 二〇一七年十月 —

二〇一七～二〇一九年度の 中心的な見通し（図表1・2）

【景気】

海外経済が緩やかな成長を続けるもとで、きわめて緩和的な金融環境と政府の大型経済対策の効果を背景に、景気の拡大が続く。二〇一八年度までの期間を中心に、潜在成長率を上回る成長を維持するとみられる。

二〇一九年度は、設備投資の循環的な減速に加え、消費税率引き上げの影響もあって、成長ペースは鈍化するものの、景気拡大が続くと見込まれる。

【物価】

消費者物価（除く生鮮食品）は、企業の賃金・価格設定スタンスがなお慎重なものにとどまっていることなどを背景に、エネルギー価格上昇の影響を除くと弱めの動きが続いている。もっとも、マクロ的な需給ギャップが改善を続けるもとで、企業の賃金・価格設定スタンスが次第に積極化し、中長期的な予想物価上昇率も上昇するとみられる。この結果、消費者物価の前年比は、プラス幅の拡大基調を続け、二％に向けて上昇率を高めていくと考えられる。

リスクバランス

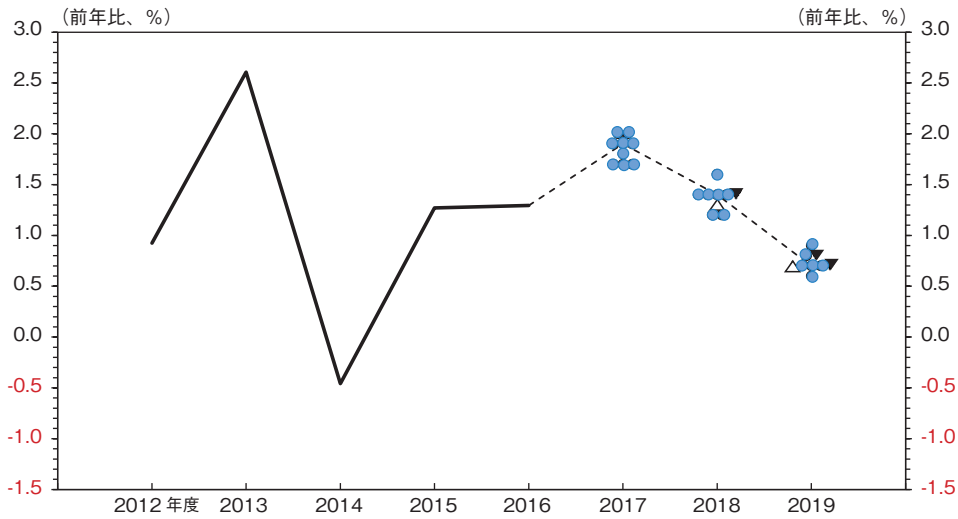
経済については概ね上下にバランスしているが、物価については下振れリスクの方が大きい。物価面では、二％の「物価安定の目標」に向けたモメンタムは維持されているが、なお力強さに欠けており、引き続き注意深く点検していく必要がある。

金融政策運営

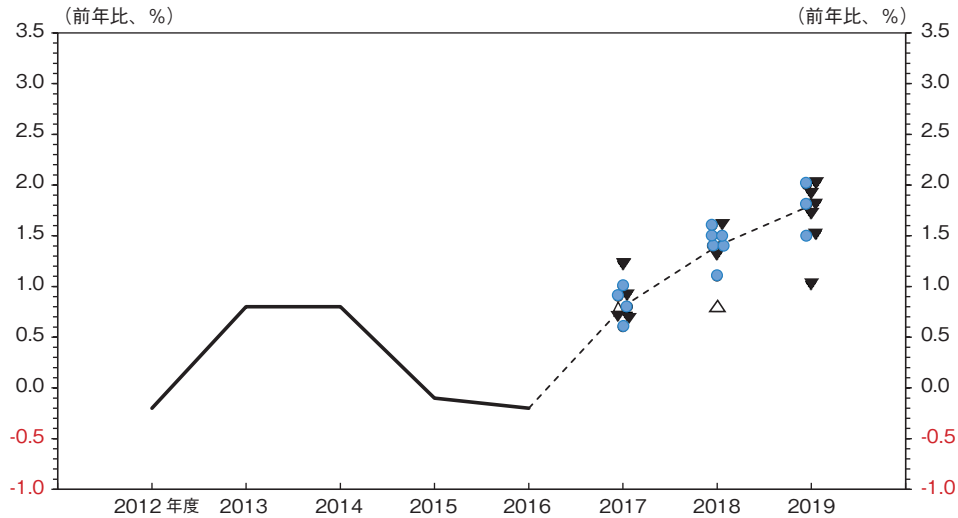
二％の「物価安定の目標」の実現を目指し、これを安定的に持続するために必要な時点まで、「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」を継続する。消費

図表 1 政策委員の経済・物価見通しとリスク評価

(1) 実質 GDP



(2) 消費者物価指数 (除く生鮮食品)



(注1) 実線は実績値、点線は政策委員見通しの中央値を示す。

(注2) ●、△、▼は、各政策委員が最も蓋然性が高いと考える見通しの数値を示すと同時に、その形状で各政策委員が考えるリスクバランスを示している。●は「リスクは概ね上下にバランスしている」、△は「上振れリスクが大きい」、▼は「下振れリスクが大きい」と各政策委員が考えていることを示している。

(注3) 消費者物価指数 (除く生鮮食品) は、消費税率引き上げの直接的な影響を除いたベース。

者物価指数 (除く生鮮食品) の前年比上昇率の実績値が安定的に二%を超えるまで、マネタ

融情勢を踏まえ、「物価安定の目

標」に向けたモメンタムを維持するため、必要な政策の調整を行う。

図表 2 政策委員見通しの中央値

(対前年度比、%)

	実質 GDP	消費者物価指数 (除く生鮮食品)	消費税率引き上げの影響を除くケース
2017年度	+ 1.9	+ 0.8	
(7月時点の見通し)	(+ 1.8)	(+ 1.1)	
2018年度	+ 1.4	+ 1.4	
(7月時点の見通し)	(+ 1.4)	(+ 1.5)	
2019年度	+ 0.7	+ 2.3	+ 1.8
(7月時点の見通し)	(+ 0.7)	(+ 2.3)	(+ 1.8)

(注) 消費税率については、2019年10月に10%に引き上げられる(軽減税率については、酒類と外食を除く飲食料および新聞に適用される)ことを前提としている。



日本銀行のレポートから

日本銀行は、わが国金融システムの安定性について包括的な分析・評価を示し、金融システムの安定確保に向けて関係者とのコミュニケーションを深めることを目的に『金融システムレポート』を年2回作成・公表しています。『金融システムレポート』の分析結果については、金融システムの安定確保のための施策立案や、モニタリング・考査を通じた個別金融機関への指導・助言に活用しています。また、国際的な規制・監督の議論にも活かしています。金融政策においても、マクロ的な金融システムの安定性評価は、中長期的な視点も含めた経済・物価動向のリスク評価を行ううえで重要な要素のひとつとなっています。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。http://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/index.htm/

「金融システムレポート」

二〇一七年十月

今回のレポートの特徴

今回のレポート（二〇一七年十月号）では、金融機関のリスクプロファイルや財務基盤に関する定量的な観点、テールイベントを想定したマクロ・ストレステストのほかに、金融システムの潜在的な脆弱性として、金融機関の低収益性と競争激化の構造的背景とその影響について考察した。具体的には、金融機関の収益や経営資源の国際比較を通して、（1）本邦金融機関は非金利収入が少なく、収益源が資金利益に偏っていること、（2）従業員数や店舗数が需要対比で過剰状態にある可能性を検証した。そのうえで、人口や企業数の全国かつ継続的な減少が、金融機関間の競争を通して、企業と金融

機関のリレーションシップやシステムリスクにどう影響を及ぼすか整理した。概要は以下のとおり。

金融市場の動向

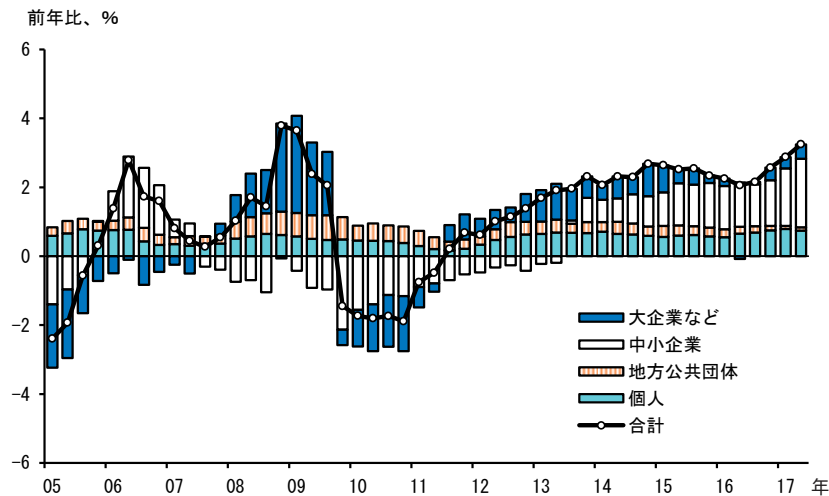
国際金融市場では、北朝鮮情勢など地政学リスクに関する懸念を抱えつつも、世界経済の緩やかな成長と堅調な企業業績が続くなか、ボラティリティは歴史的な低水準を維持している。FRBが利上げを進めるもとでも、新興国市場の動向を含め国際資本フローに大きな変動はみられていない。投資家のリスクテイク姿勢が維持されるなか、世界的に株価は上昇し、信用スプレッドも縮小傾向を辿っている。この間、わが国では、日本銀行が進める長短金利操作付き量的・質的金融緩和のもと

で、きわめて緩和的な金融環境が続いている。

金融仲介活動の点検

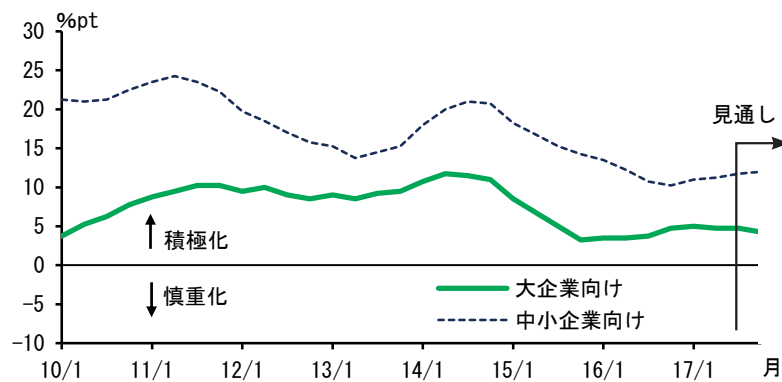
金融機関の貸出をみると、外貨調達コストの上昇等を背景に海外貸出の拡大テンポは鈍化傾向にあるが、国内貸出の前年比はプラス幅が緩やかに拡大しており、足もとでは三割程度となっている。金融機関の積極的な融資姿勢のもと、資金需要も中小企業向けを中心に増加している（図表1、2）。有価証券投資では、ひと頃減少していた外債残高を再び積み増す動きがみられるほか、投資信託の運用も増加傾向を辿っており、金融機関は積極的なリスクテイク姿勢を維持している。また、保険会社・年金などの機関投資家も、低

図表 1 金融機関の借入主体別貸出



(注) 直近は 17 年 6 月末。海外円借款、国内店名義現地貸は除く。
 (資料) 日本銀行

図表 2 貸出運営スタンス DI



(注) 1. 直近は 17 年 7 月。
 2. 貸出運営スタンス DI は、回答金融機関数の構成比をもとに、次式で定義。
 $DI = \text{「積極化」} + 0.5 \times \text{「やや積極化」} - 0.5 \times \text{「やや慎重化」} - \text{「慎重化」}$
 3. 後方 4 期移動平均。

(資料) 日本銀行「主要銀行貸出動向アンケート調査」

図表 3 金融活動指標

	80年	81年	82年	83年	84年	85年	86年	87年	88年	89年	90年	91年	92年	93年	94年	95年	96年	97年	98年	99年	00年	01年	02年	03年	04年	05年	06年	07年	08年	09年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年		
金融機関																																								
金融機関																																								
金融市場																																								
民間全体																																								
家計																																								
企業																																								
不動産																																								
資産価格																																								

(注) 1. 直近は、金融機関の貸出態度判断 DI、株価は 17 年 7～9 月、地価の対 GDP 比率は 17 年 1～3 月、その他は 17 年 4～6 月。
 2. 「赤」は指標が上限の閾値を超えて過熱していることを、「青」は指標が下限の閾値を下回って停滞していることを、「緑」はそれ以外を示す。「白」はデータがない期間を示す。

(資料) Bloomberg、財務省「法人企業統計」、東京証券取引所「信用取引残高等」、内閣府「国民経済計算」、日本不動産研究所「市街地価格指数」、日本銀行「貸出先別貸出金」「資金循環統計」「全国企業短期経済観測調査」「マネーサプライ」「マネーストック」

金利環境が続くなか、外債等を中心にリスク性資産を引き続き積み増している。この間、CP・社債の発行レートはきわめて低い水準で推移しており、企業のデット・ファイナンスは増加している。

以上のように、民間非金融部門の資金調達環境はきわめて緩和し

た状態にあるが、全体として金融経済活動において行き過ぎた動きはみられない(図表 3)。積極的な金融機関の貸出態度や良好な社債発行環境を背景に、マクロ的な信用量(対 GDP 比)は上昇しており、企業部門は収益改善期待に支えられて前向きな投資行動を維持して

いる。不動産市場については、首都圏などで引き続き高値取引がみられるが、全体として過熱の状況にはないと考えられる。商業用不動産取引市場では、先行きの供給増加見通し

もあって、不動産価格の上昇には頭打ち感がみられるほか、不動産投信（REIT）市場においても、投資家が期待を一段と強めている様子は窺われない。ただし、国際金融市場でストレスが発生し、リスクオフの動きが広がるような場合には、国内不動産市場にも影響が及ぶ可能性があり、その動向には今後とも注視していく必要がある。

金融システムの安定性

金融経済活動において大きな不均衡がみられないほか、金融機関は全体として資本と流動性の両面で相応に強いストレス耐性を備えていることから、わが国の金融システムは安定性を維持していると判断される。金融機関は充実した資本基盤を備えており、当面収益力が下押しされるもとでもリスクテイクを継続していく力を有している。貸出の積極化などによる金融機関のポートフォリオ・リバランスは、経済情勢の改善に寄与してきており、これが企業や家計のより前向きな経済活動へと結

びついていけば、金融機関の収益力の回復にもつながっていくと考えられる。もともと、預貸利鞘の縮小傾向が続くなかで、金融機関が収益維持の観点から過度なリスクテイクに向かうことになれば、金融面での不均衡が蓄積し、金融システムの安定性が損なわれる可能性がある。一方で、収益力の低迷が続き、損失吸収力の低下した金融機関が増えれば、金融仲介機能が低下し、实体经济に悪影響を及ぼす可能性もある。

金融機関の収益力低下に伴う潜在的な脆弱性

金融機関の収益低下は、日本だけではなく、低金利環境が続く先進国において概ね共通にみられる現象であるが、そうしたなかでも、本邦金融機関の収益性は国際的にみて低さが目立つ（図表4）。従業員数や店舗数は、需要対比で過剰（オーバーキャパシティ）になっている可能性が高く、このことが本邦金融機関間の競争の激化を通じて収益性を低下させる構造的要因となっている（図

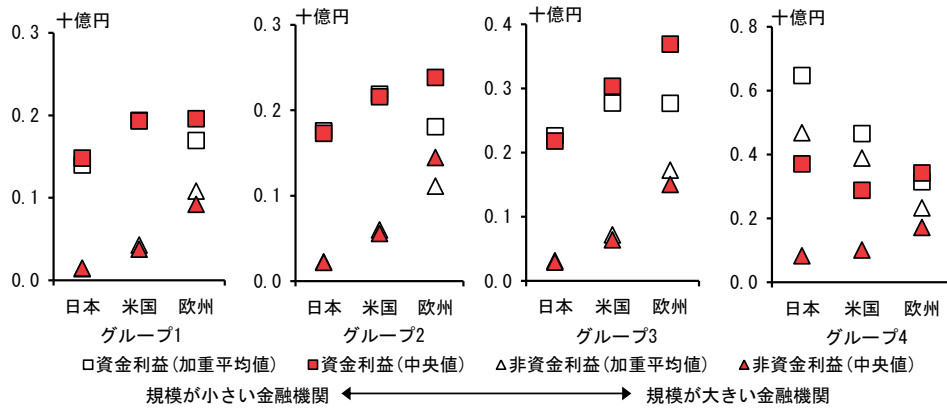
表5、6）。企業の廃業率が開業率を上回り、企業数が全国的に減少するなかで、金融機関の各店舗が新たな取引機会を求めて法人営業を強化してきた結果、企業の取引金融機関数は増加している。これを企業の立場からみると、取引金融機関数を増やすことによって、より有利な貸出条件を引き出すことができるようになったと考えることができる。しかし、企業が借人を行う際に、これまでの取引履歴や企業支援力にかかわらず、複数の取引金融機関の中から貸出金利の一番低い金融機関を選択することが常態化すれば、中長期的には金融機関の情報生産活動の停滞を通して資金配分の効率性が低下する可能性も考えられる。

マクロブルーデンスの視点からみた課題

人口や企業数の減少は全国共通にみられるショックであり、そのもとの地域金融機関間の競争激化は、資金利益の減少という共通エクスポージャーの影響度の増大を通じ

て、システムリスクにも影響を及ぼし得る。わが国の金融システムにおいて、金融システムの効率性と安定性の双方を将来にわたって維持していくためには、適正な競争環境のもと、金融機関が収益性を改善させていくことが重要である。具体的には、(1) 提供するサービスの差別化や非資金利益の拡大による収益源の多様化など、自らの強みを活かした収益力強化に努めていくこと、(2) よりきめ細かい採算管理を実施し、他金融機関との競争も踏まえ、た効率的な店舗配置や提供するサービスのの見直しを行うこと、(3) 業務改革を進め、設備と従業員の適正配置によって、労働生産性を向上させていくことが重要である。金融機関間の合併・統合や連携も、収益性改善の選択肢の一つになる。日本銀行としても、調査・モニタリング等を通じてそうした金融機関の動きをサポートするとともに、マクロブルーデンスの視点から競争環境の変化が金融システムに及ぼす影響について引き続き注視していきたい。

図表4 金融機関 1店舗当たりの資金利益と非資金利益

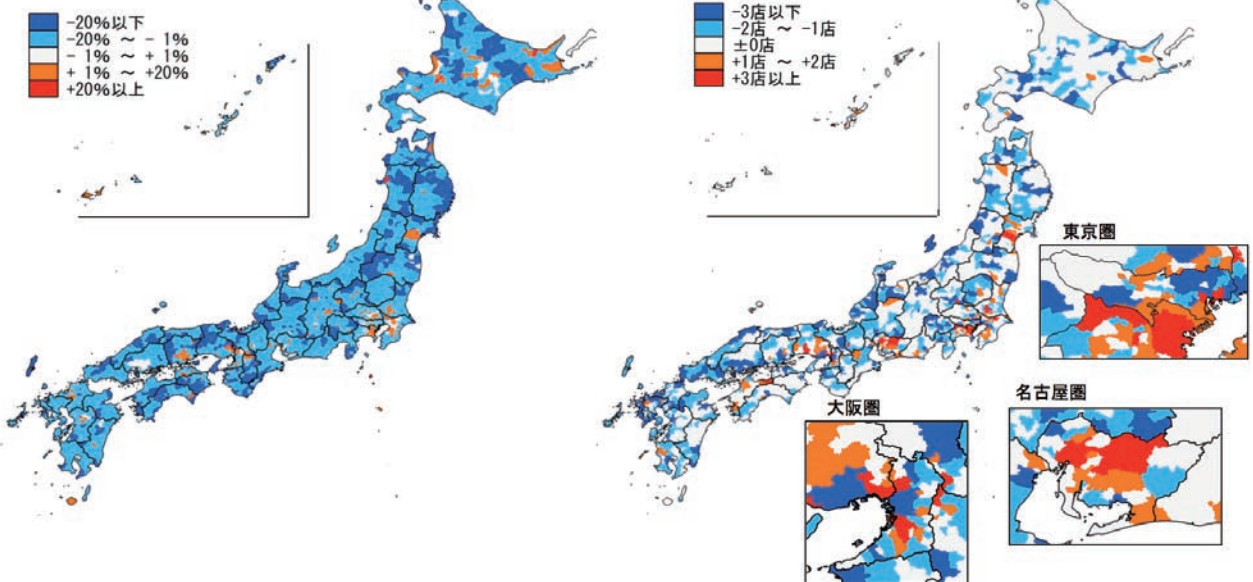


(資料) OECD、S&P Global Market Intelligence、各社開示資料、日本銀行

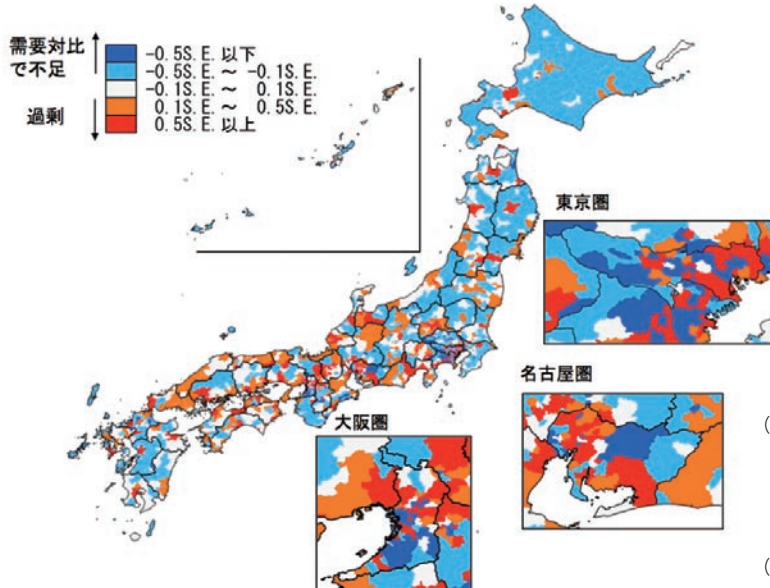
図表5 企業数と金融機関店舗数

企業数の変化 (2004 → 2014 年の変化率、%)

金融機関店舗数の変化 (2005 → 2015 年、店)



図表6 市区町村単位でみた金融機関店舗数の過剰度合い



(注) 2015年と2005年の金融機関店舗数(右図)はそれぞれ、同年の情報に掲載されている「2016年版 日本金融名鑑」と「2006年版 日本金融名鑑」による。

(資料) 国土交通省、総務省、日本金融通信社

(注) 1. 2015年時点。
2. 店舗の過剰度合いについては、FSR(2017年10月号 BOX1)を参照。
3. 大阪府と神奈川県、愛知県内の政令指定都市は、行政区単位で推計。

(資料) 国土交通省

デジタルイノベーションに関する国際会議を開催

▼決済機構局では、十月四日から五日にかけて、国際決済銀行（BIS）との共催で「CPMI（注）Workshop on Digital Innovations: Money in the Digital Age」と題する金融イノベーションに関する国際会議を開催しました。参加者は、主要先進国のほかアジア・ラテンアメリカを含む約二五カ国から



会合の様子（撮影：野瀬勝一）

五〇名以上に上りました。

▼会議の冒頭、黒田東彦^{はるひこ}総裁が挨拶を行い、金融イノベーションを経済厚生の上につなげていくために、金融機関やIT企業、公的部門など、多様な主体が協力していくことの重要性などが強調されました。

黒田総裁の挨拶は、「日銀HPの「決済・市場」→「決済・市場」に関連する講演・挨拶等の一覧」のコーナーをご覧ください。

▼その後のパネルディスカッションでは、デジタル通貨をはじめとする金融イノベーションが社会に与えるインパクトや課題といった論点について、活



冒頭、挨拶をする黒田総裁（撮影：野瀬勝一）



国際的な議論をリードする山岡局長(左)と小早川参事役(右)
(撮影：野瀬勝一)

発な議論が交わされました。この中では、日本銀行と欧州中央銀行（ECB）が共同で行っている分散型台帳技術に関する調査「プロジェクト・ステラ（Project Stella）」の内容も紹介されました（日銀HPでも九月六日に報告書を公表しています）。また、初日には、中央銀行に加え学界や民間セクターの参加者からもプレゼンテーションが行われました。

▼デジタルイノベーションを



プロジェクト・ステラに関するプレゼンテーションの様相

巡っては、各国中央銀行における取り組みや国際的な議論がますます活発化しています。日本銀行としても、引き続きこうした議論に積極的に貢献していきたいと考えています。

（注）CPMIは、BIS傘下の決済・市場インフラ委員会（Committee on Payments and Market Infrastructures）。決済・市場インフラ分野において、中央銀行間の協調を促進するとともに、国際的な基準設定を行うフォーラムを開催。日本銀行もメンバーとなっています。

旧小樽支店金融資料館では特別展を開催中

二〇一八年二月二十日(火)まで

▼旧小樽支店金融資料館では特別展「たてものいろいろ ―お札に描かれた建物・建築家―」を開催しています。

建築家・辰野金吾や長野宇平治らの設計による建物が魅力の旧小樽支店金融資料館。その館内で、さまざまな建物が描かれた世界各国の紙幣約九〇点を紹介しています。

ギユスターヴ・エッフェル(一八三二〜一九二三)とエッフェル塔(フランス)のように建築家とその建築家の設計した建物が描かれた紙幣、ピサの斜塔(イタリア)や万里の長城(中国)など世界遺産の建物が描かれた紙幣、議会の建物が描かれた紙幣など、世界のさまざまな建築デザインをご覧いただけます。

また、現在一九カ国で使わ

れている単一通貨ユーロ紙幣は、域内で共通に使われるため、特定の国の建物は避け、欧州の時代と様式をテーマとしています。ギリシャ・ローマ時代の古典期から、ゴシック、ルネサンスや現代までの各時代を代表する建築様式を取り入れた窓、橋などが描かれています。二〇一三年から発行されはじめた新シリーズも展示しています。現実には存在しない建築物のデザインを見ながら、各国の

実在する建物を思い浮かべてお楽しみください。

特別展開催期間中、二〇一八年二月九日(金)〜十八日(日)まで、小樽市内では地元イベント「小樽雪あかりの路」が開催されます。この期間は金融資料館すぐそばの北海道の開拓を支えた鉄道跡(旧手宮線)や小樽運河などを中心に、市内各所が灯されます。降り積もった雪があかりに照らされ広がる幻想的な風景と、歴史を感じさせる

特別展
たてものいろいろ
—お札に描かれた建物・建築家—

開催期間
2017年11月17日(金)
～2018年2月20日(火)

●休館日：水曜日、年末年始(12月29日～1月5日)
●開館時間：4月～11月 9:30～17:00(入館は16:30まで)
12月～3月 10:00～17:00(入館は16:30まで)

日本銀行旧小樽支店 金融資料館 入館無料
北海道小樽市色内1-11-16
TEL 0134-21-1111
http://www.jbc.or.jp/naara/



雪景色の金融資料館

金融資料館のたたずまいも見どころになります。

金融資料館でも、二〇一八年二月九日(金)〜十一日(日)、十七日(土)の四日間は開館時間を午後七時まで延長します。皆さまのご来場をお待ちしております。

【入館料】無料

【休館日】水曜日、年末年始

(二〇一七年十二月二十九日(金)～二〇一八年一月五日(金))

編集後記

■日本銀行の宮野谷理事は、点描画の創作に取り組んでおり、11月下旬に上野・東京都美術館で開催された美術展に作品を出展しました。私もこっそりと観賞に訪れましたが、なんとそれは、「伊根の舟屋群」というタイトルの優しい静寂が伝わってくる美しい作品でした。本号の地域の底力は「海の京都」丹後地方、その扉ページの写真は伊根町・舟屋群の夜景です。この偶然の一致に驚きました。理事によると、大阪支店長時代にこの美しい風景に出会い「日本の原風景が地元の人々の努力により維持されていることに感銘を受けた」とのこと。今回の地域の底力では、さらに新展開する丹後地方の今をお届けします。さて、本誌2006年第5号から始まった「地域の底力」について、2016年第48号までを取りまとめ「にちぎん別冊 地域の底力」を11月下旬に発刊しました。印刷部数に限りがあるため、全国の地方自治体や図書館等にお送りして皆様の閲覧に供することにしました。この10年超の地方創生の進化を、マイクロベースで振り返ることにお役に立てれば幸いです。(鶴海)

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。
(http://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ (<http://www.boj.or.jp/>) をご覧ください。

にちぎん 2017年冬号
編集・発行人 鶴海誠一
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-2405



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 文唱堂印刷株式会社
©日本銀行情報サービス局 禁無断転載

【開館時間】

午前10時～午後5時

【開館時間延長日】

二〇一八年二月九日(金)～
十一日(日)、十七日(土)は
午後七時まで開館します。※最新の情報は金融資料館HP
をご覧ください。

【所在地】

北海道小樽市色内一丁目一六

【お問い合わせ先】

金融資料館

〇三三四―二二―二二

「広報誌「にちぎん」の
「別冊」を発刊しました

本誌掲載の役員と各界の第一人者との対談「守・破・創」と「地域の底力」の二〇一六年冬号(四八号)までの記事を各々一冊にまとめた「別冊」を、十一月二十七日に発刊しました。全国の図書館等にお配りしておりますので、ぜひご覧ください。

【お詫びと訂正】

本誌五一号(九月二十五日発行)の「日本銀行のレポートから1」に掲載された「地域経済報告」(さくらレポート)―二〇一七年七月―の一部に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

■二四ページ図表

女性の活躍推進に向けた取り組みと、わが国経済の成長力への影響

(誤) 人出不足

(正) 人手不足



R62 地下鉄電車 (写真提供：川崎重工業株式会社)

ニューヨークの地下鉄に日本の技・心遣いあり

きらびやかな摩天楼が建ち並ぶマンハッタンと、ブルックリンなどイーストリバーを挟んだ近隣地区を結び、ニューヨーク市の地下の大動脈となっているのがメトロ（地下鉄）です。1904年の開業以来、幾度となく延長されてきた線路は全長 662 マイル（約 1065km。営業キロ（注）は約 374km）に及びます。その上を日々 6000 超の車両が甲高い金属音を立てながら 24 時間忙しく往来しています。開業当初 5 セントだった初乗り運賃は 1948 年まで据え置かれた後、合計 17 回もの値上げを経て現在は 2.75 ドルになりました。ただ、どこまで乗っても同一運賃というのは今も昔も変わりません。

多様なバックグラウンドを背負った人々が行き交う国際都市の発展を見守ってきたメトロでしたが、



宇田川氏デザインの R143 地下鉄電車の車内

1970～80年代は不景気から街の治安が著しく悪化し、駅構内や車内でも犯罪がまかり通ってしまう危険な公共交通機関となっていました。その後メトロの治安は大きく改善しましたが、それには日本の技が貢献してきたことをご存じでしょうか。

当時、メトロ関係者を悩ませていた問題の一つが、車両のあちこちにあふれていたグラフィティと呼ばれる派手な落書きであり、いろいろな犯罪を助長するものと考えられていました。そこに登場したのが川崎重工業株式会社の車両「R62」です。車体の内外がステンレスで覆われていることから、落書きの除去を容易に行えるようになりました。また、空間デザインの力で犯罪抑止に貢献したとされるのが、日本人工業デザイナー・宇田川信学^{まさみち}氏です。同氏がデザインした車両に足を踏み入ると、車内が白昼のように明るく、広々と感じられる等の工夫が施されています。もしこうした日本の技がなかったならば、メトロは違う道を歩んでいたのかもしれない。

今日も眠らぬ街ニューヨークでは、利用者の安全を願う気持ちの込められた車両が、喜怒哀楽をそれぞれに抱えた何百万人もの人生を運んでいます。

（日本銀行ニューヨーク事務所）

注：営業キロとは営業区間の距離をキロメートル単位で示したものです。

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

にちぎん 第三卷 第四号 通巻五二号 平成二十九年十一月二十五日発行



にちぎん